

# 統合失調症患者の薬物療法に関する 処方実態調査(2018年)その2

～全国86施設の入院患者と62施設の外来患者と  
の比較検討～

○桜ヶ丘記念病院 佐藤 康一

精神科臨床薬学(PCP)研究会

高橋 結花、柴田 木綿、宇野 準二、加藤 剛、梅田 賢太、

高田 憲一、三輪高市、天正 雅美、野田 幸裕、吉尾 隆

## 倫理的配慮

本調査や解析では個人情報を慎重に取扱い、十分に倫理的配慮を行った。

利益相反(COI)開示

筆頭発表者名: 佐藤康一

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

# 目的

- ▶ 精神科臨床薬学研究会（以下、PCP研究会）会員の所属する施設に入院または外来通院している統合失調症患者について処方実態調査を行い薬物療法の実態を把握する。
- ▶ 本報告（その2）では、入院患者と外来患者の経口抗精神病薬単剤処方患者の薬剤選択とBody Mass Index（以下、BMI）について報告する。

# 方 法

## ▶ 対象

PCP研究会会員の所属する、全国86施設に入院中の統合失調症患者 11,727人、及び全国62施設に外来通院中の統合失調症患者 8,482人

## ▶ 調査日

入院患者2018年10月31日、外来患者2018年10月22～27日

## ▶ 調査項目

年齢、性別、身長、体重、血圧、心電図異常、血液、生化学、血糖、服薬回数、服薬指導実施の有無、抗精神病薬、抗パーキンソン薬、抗不安薬・睡眠薬、気分安定薬の投与剤数および投与量

# 調査対象

	入院患者	外来患者
施設数	86	62
患者数 (男/女)	11727 (5858/5869)	8482 (4254/4228)
年齢 (min-max)	59.1 (9-103)	51.2 (9-94)
服用回数 (min-max)	3.3 (0-13)	2.7 (0-14)

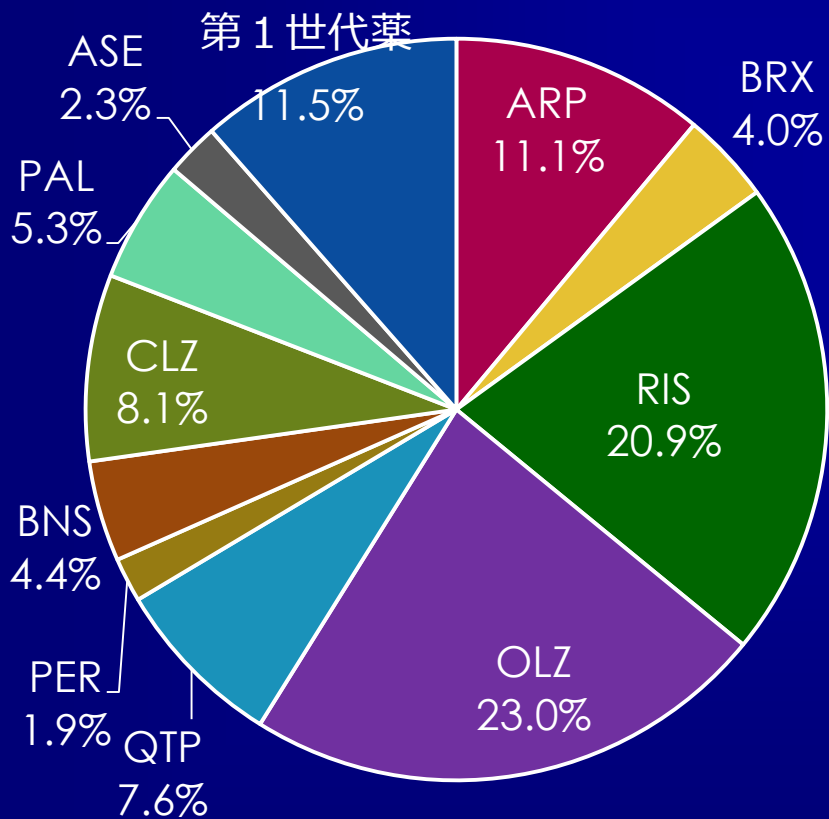
# 各薬剤群の剤数と投与量

		入院患者	外来患者
抗精神病薬※	剤数	1.67	1.48
	CP換算 (mg)	703.31	536.69
抗パーキンソン薬	剤数	0.41	0.43
	BP換算 (mg)	1.04	1.04
抗不安薬・睡眠薬	剤数	1.11	1.14
	DAP換算 (mg)	9.08	9.62
気分安定薬	Li (mg)	548.03	541.23
	CBZ (mg)	441.98	410.51
	VPA (mg)	653.56	578.39
	LTG (mg)	168.80	162.73

※ブレクスピプラゾールを除く

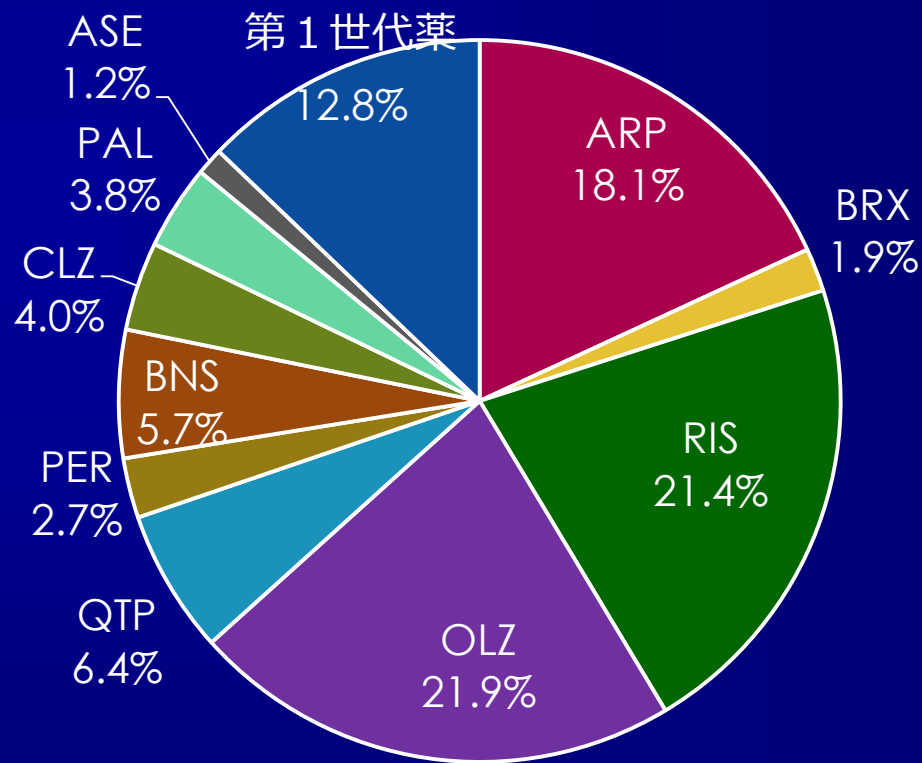
# 経口抗精神病薬単剤処方患者 (LAI使用無) の薬剤選択

## 入院患者



計4662人

## 外来患者



計4102人

# 経口抗精神病薬単剤処方患者 (LAI使用無) の薬剤選択

	入院患者	外来患者	外来／入院
ARP	11.1%	18.1%	163.6%
BRX	4.0%	1.9%	48.5%
RIS	20.9%	21.4%	102.2%
OLZ	23.0%	21.9%	95.6%
QTP	7.6%	6.4%	85.2%
PER	1.9%	2.7%	138.9%
BNS	4.4%	5.7%	130.3%
CLZ	8.1%	4.0%	48.9%
PAL	5.3%	3.8%	71.0%
ASE	2.3%	1.2%	52.6%
第1世代薬	11.5%	12.8%	112.0%



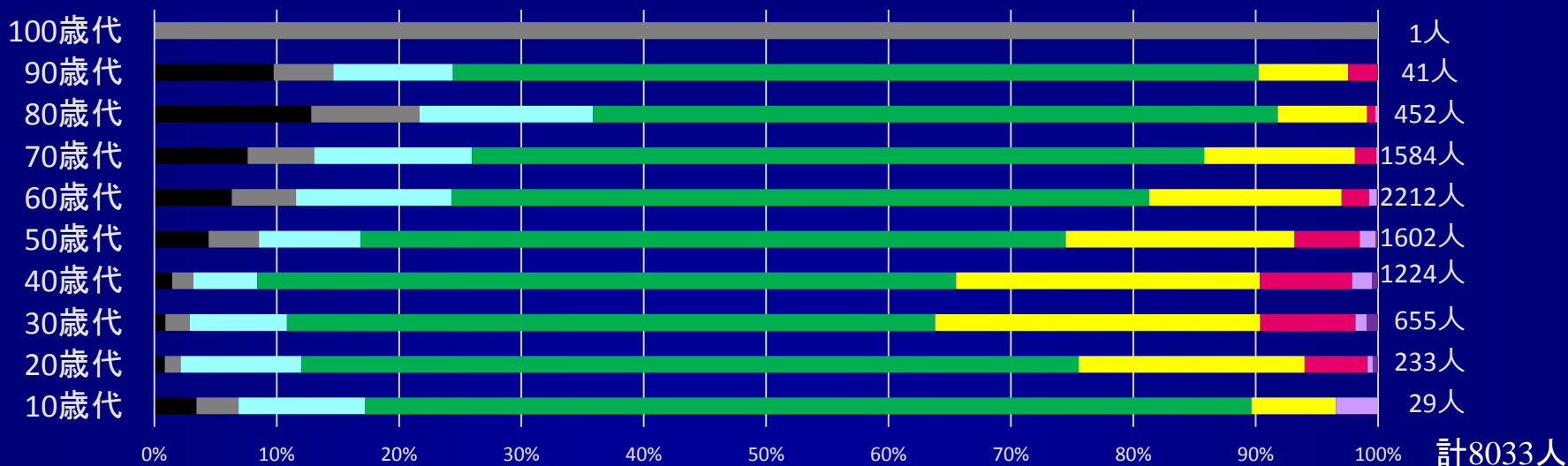
# 経口抗精神病薬単剤処方患者 (LAI使用無) の平均投与量

	入院患者	外来患者
ARP	15.59	12.75
BRX	1.85	1.78
RIS	3.86	3.54
OLZ	12.86	10.85
QTP	295.63	220.69
PER	17.27	13.41
BNS	13.82	11.92
CLZ	360.16	340.91
PAL	8.07	6.74
ASE	14.58	11.65

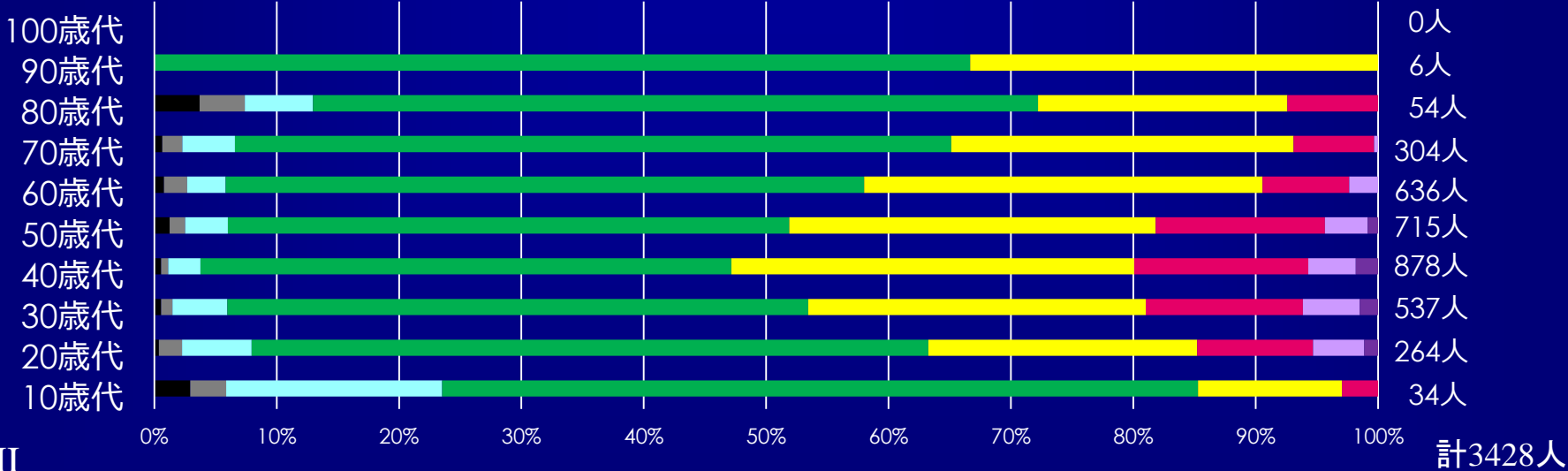
単位:mg

# 入院患者と外来患者のBMIの分布比較

入院患者



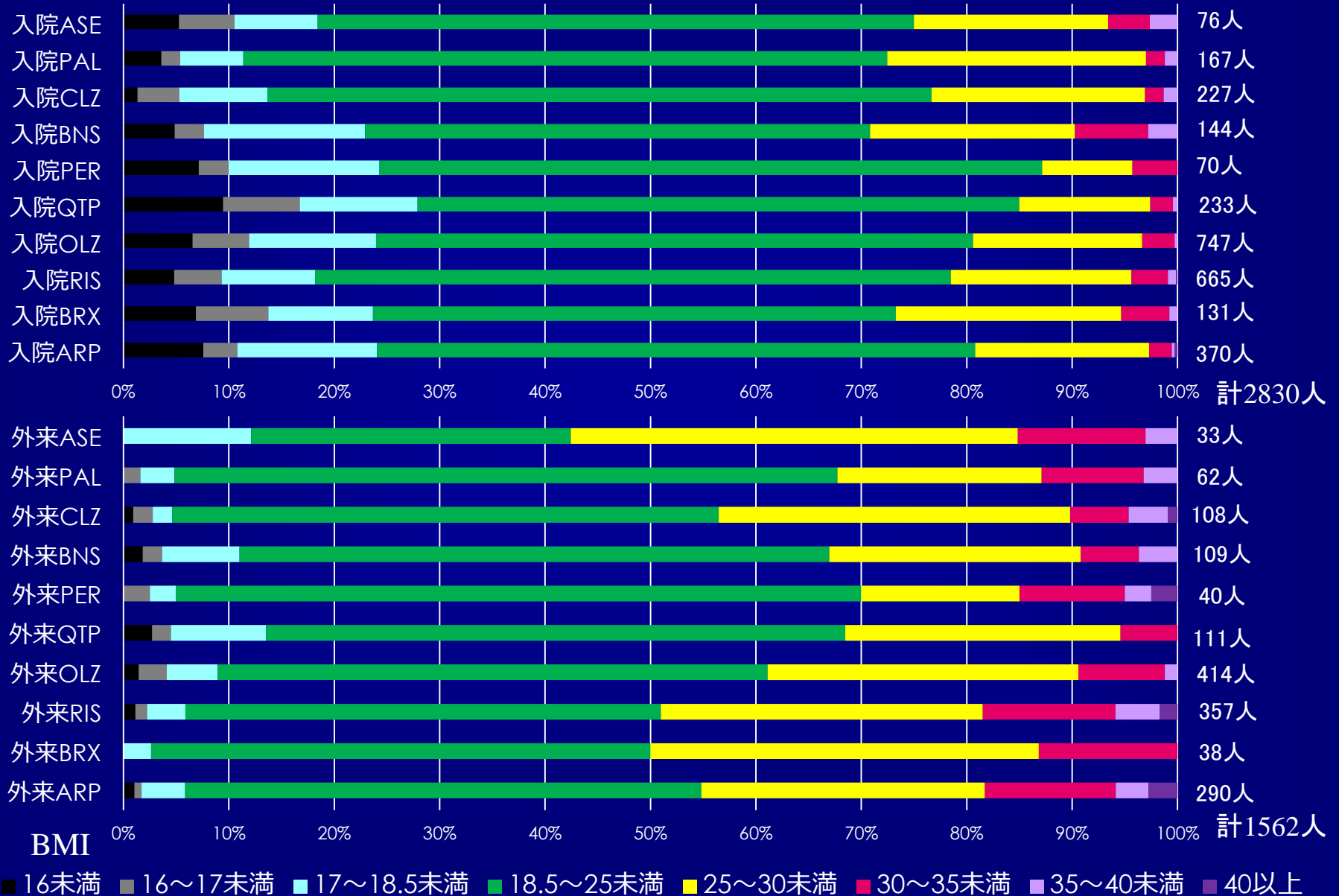
外来患者



BMI

16未満
  16~17未満
  17~18.5未満
  18.5~25未満
  25~30未満
  30~35未満
  35~40未満
  40以上

# 経口抗精神病薬単剤患者のBMIの分布



# 考 察 1

- ▶ 外来患者は抗精神病薬平均投与量が少なく、単剤処方時の薬剤選択でアリピプラゾールやペロスピロン、ブロナンセリンが選択されやすいことは、過鎮静や体重増加、脂質異常、耐糖能異常、錐体外路症状、高プロラクチン血症等の副作用回避を重視していることや、それが可能な病状であることが示唆された。
- ▶ ブレクスピプラゾールやアセナピンが外来患者に選択されにくいことは、その一因として、処方日数制限や制限解除から日が浅いことが推測される。
- ▶ クロザピンが入院患者で多いことから、治療抵抗性統合失調症患者の入院治療に依然として難渋するケースが少なくないことが示唆された。

# 考 察 2

- ▶ 入院患者に“痩せ”が多いことから、錐体外路症状や過鎮静、ADL、認知機能、運動機能、陰性症状など、患者の生活状況と薬物療法について総合的な点検が必要である。
- ▶ 体重増加を生じやすい抗精神病薬を投与中の入院患者にも“痩せ”が多いことから、体重増加を生じやすい抗精神病薬への変更だけでは、“痩せ”への対処に必ずしも十分ではないことが示唆される。
- ▶ 外来患者に“肥満”が多いことは、入院患者に比べ食生活に問題を抱える患者が多いことを示唆している。